

令和元年度 学校評価総括表

五條市立宇智小学校

		あかるく やさしく たくましく 一自ら学び 夢に向かってがんばる子の育成			総合評価				
運営方針		○強い使命感をもった教職員集団で、子どもたちの「社会を生き抜く力」を育てる。 ○保護者・地域と学校が双方向で協力し合える学校づくりを通して、地域の人々から愛され信頼される学校を目指す。			A				
平成30年度の成果と課題		本年度の重点目標	具体的目標						
○教職員が高い意識をもって、授業力向上と授業改善に取り組んだ結果、児童の主体的に学習に取り組む意欲が高まっている。 ○家庭との連携や学習の成果を感じる工夫した取組を進めることで、児童が自ら課題を見つけて計画的に取り組む家庭学習習慣が身に付いてきた。 ○学校全体で同じゴールに向かって、系統立ててふるさと学習に取り組むことで、児童のふるさとを自慢したいという思いを高めることができた。 ●放課後子ども教室等によって学習への苦手意識が高い児童の意欲は高まってきたが、個々の課題を把握した指導を進めていかねばならない。 ●読書活動の成果は出てきているが、関係機関の協力等を得ながら魅力ある図書館づくりを進めていくことが必要である。 ●体力面の課題を把握し、継続的な取組を行うことや、児童が自身の体力向上を感じられる場を設け、運動習慣の定着を進めていかねばならない。 ●校内だけでなく、地域の方々や来校者にも気持ちの良い挨拶ができるよう取組が必要である。		◎主体的に学ぶ力をさらに向上させる。	○対話と協働(交流)を通して、深い学びにつなげる。						
		◎自分や地域の良さを意識し、思いやりの心を育む。	○確かな学力を育むため、児童が主体的に学ぶ授業づくりの研究を一層推進する。						
		◎心身の健康増進と運動能力を向上させる。	○いつでもどこでも進んで気持ちよい挨拶を交わし、他者との関わりを通して自分も他者も大切にすることができる児童を育成する。						
			○ふるさと学習の取組をさらに充実させ、ふるさとに学び、ふるさとを愛する思いを育てる。						
			○自ら進んで基本的な生活習慣を身に付けようとする意識を高める。						
			○自分の課題を明確にし、課題に応じた活動を計画的に取り入れて、体力や運動能力の向上に根気よく取り組むことができる。						
評価項目	具体的目標(評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果と課題(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策			
主体的に学ぶ力をさらに向上させる。	A 対話と協働(交流)を通して、深い学びにつなげる。	学力二極化の解消に向けて、系統的に基礎・基本の力を身に付ける取組を工夫して学力の底上げを図る。標準調査全国平均以上を目指す。	B	○児童や学級の学習に向かう力や雰囲気が高まっている。そのことが必ず学力の二極化の改善への土台となる。学力テストの分析と考察から、日々の指導に取り入れる意識をもつことができた。 ●二極化への改善はあるものの、今後も底上げが必要。 ○アンケートや授業の振り返りでも、自分の考えの広がりや深まりを実感している児童が多かった。うちの子集会は、相手意識を高めて言語活動に向かう場として充実した内容になった。 ○アンケート結果の90%の達成率は、日々の自主学習への指導や声かけ、コメントの成果であると感じる。自主学習が自ら課題を見つける力に繋がっていると感じる。学級や異学年での自主学習交流など、学びの場があることも向上に繋がった。 ○図書館司書さんとの連携により、読書に親しむ機会を多く作ることができ、環境を整備することができた。さらに、図書室だけでなく、おすすの本や読み聞かせについて紹介している。読書を楽しんでいる児童は89%になっており、授業や取組の成果が出ている。 ●20分以上読書している児童は73%であり、今後も読書に親しむ児童の育成を図っていく必要がある。	基本は、授業の中で児童の力をつけていく必要がある。定期的に既習事項(前学年や前学期)を授業の始めに取り入れるなど、定着にはくり返しが必要になってくる。児童に交流のよさを実感させていくことが重要。交流によって生まれた発見や変化を大切にしていこう。 ・高学年で、中学校の計画表をアレンジして実施することができた。中学校を意識した時、自主学習は「点数に結びついてもいいか」という視点は必要になってくる。読書活動の充実では、学年に応じた目標が必要になってくる。 ・今年度の取り組みを引き続き行い、図書環境を維持する。 ・図書だけでなく、各種通信等で家庭への呼びかけを継続していく。	・目指す児童像の実現に向けて具体的な取組がなされ、成果に繋がっていることが児童アンケートの結果に反映されている。 ・学力の二極化等の課題はあるが、それに対して方策が練られ、様々な手立てが実行されている。取組を具体化していくための組織が確立されており、全教職員が課題に向かって一丸となって取り組んでいる様子が見える。 ・タブレットを活用した学習など、新しい教育の手法も積極的に取り入れた授業づくりを行い、児童の「やる気」を引き出す工夫がなされている。それが成果に繋がるしかけとなっており、またやりたくなる良いサイクルが回っている。			
		交流を重視した授業づくりに継続して取り組むとともに、国語科の研究による言語力の充実を図ることで、自分の考えを広げたり、深めたりすることができたとする児童の自己評価90%達成を目指す。	A						
	B 確かな学力を育むため、児童が主体的に学ぶ授業づくりの研究を一層推進する。	A	中学校区で同じ学力観のもとに家庭学習の在り方を共有し、家庭の理解・協力を得ながら児童の発達段階に応じた家学(自主学習)を推進していく。自己評価で自ら課題を見つけ、自主的な学習に取り組めた児童90%達成を維持する。				B		
	図書を活用した学習や、読書の楽しさを味わう機会を積極的に作り、個々の目当てを明確にして家読(うちどく)を推進していく。自己評価で1日20分以上読書を80%、週2回以上図書館利用60%を目指す。	B							
自分や地域の良さを意識し、思いやりの心を育む。	C いつでもどこでも進んで気持ちよい挨拶を交わし、他者との関わりを通して自分も他者も大切にすることができる児童を育成する。	挨拶を通して、コミュニケーション力の向上をはかり、気持ちよく他者とつながりあえる学校環境づくりを推進する。自主的な挨拶90%の達成率を維持する。	B	○アンケートの結果から、自主的な挨拶について90%を達成できている。 ●実際には自主的に気持ちよく挨拶ができていない児童は90%以上とは言えない現状はある。地域の方々や来校者にも自分から積極的に挨拶をする等、他者とのつながりを意識した挨拶になるよう指導の継続が必要。 ○運営委員会による挨拶運動の取組は成果に繋がっている。 ●今後、継続や充実の観点から、学級でも引き続き力を入れて取り組む必要がある。 ●地域の方々や来校者に対して挨拶している児童の割合が友だちや先生に対しての挨拶に比べて若干低くなっている。	挨拶の大切さを理解している児童は多い。今後、挨拶が自然とできるよう、児童間の挨拶にも力を入れていく必要がある。 ・挨拶がなぜ必要なのかを学校全体、学級で引き続き指導していく。	・学校外の活動で、宇智小の子ども達がきちんと挨拶をしている様子を他地域の方から伺い、大変嬉しく思うことがあった。日頃の学校での働きかけがしっかりと身に付いていると感じる。挨拶ができることは将来に繋がる大切な力。これからも力を入れて取り組んでほしい。			
		校内での挨拶運動の一層の充実を図るとともに、学校外の場でもその大切さを自覚し、積極的な挨拶ができるよう、道徳の学習や、特別活動、学級活動を活性化させる。	A						
	D ふるさと学習の取組をさらに充実させ、ふるさとに学び、ふるさとを愛する思いを育てる。	A	系統立ったふるさと学習を計画的に推進し、「宇智小LINK」を充実・発展させていく。学年間や他校との交流の場を設定し、学びを発信し合うことでつながりの深化を図る。				A	年間計画を見直し、学年間・他校との交流や発表の場の設定や、新しい地域教材の発見、地域ボランティアの方々に協力を仰ぐなど、より一層のふるさと学習の充実を図る。	・統合によって新しい学校となるが、これまで取り組んできた地域の学びを大切に引き継ぎながら、新しい学校として更に積み上げていってほしい。
	ふるさと学習推進や、地域ボランティアも方々との日々の関わりによって、児童が地域との繋がりを実感し、ふるさとを愛し、誇りに思える感性を育んでいく。児童の自己評価で85%の達成を目指す。	A							
心身の健康増進と運動能力を向上させる。	E 自ら進んで基本的な生活習慣を身に付けようとする意識を高める。	基本的な生活習慣を確立するため、すこやかチェックシートを活用して自分の生活習慣を振り返る機会を繰り返し持たせ、保護者の積極的な協力を得ながら、達成率90%以上を目指す。	B	○すこやかチェックの定期的な実施や生活習慣に関わる指導を実施していくことで、基本的な生活習慣への意識が児童だけでなく保護者も高まっている。 ●ゲーム時間はチェックの期間は取り組んでいるが、習慣化できていない。達成率80%であり、2極化があること、睡眠時間の確保が課題である。 ○すこやかタイムの実施により、落ち着いて一日をスタートできる環境が定着している。各学年での自尊感情を高める学習やエンカウンターにより自他の心健康に目を向けようとしている児童が多く見受けられた。 ●今後も職員が情報共有し、一斉または、個別の対応を続けていくことが大切である。	・よりよい生活習慣への継続的な指導と個別指導の必要がある。 ・支援を必要とする児童への個々の対応の在り方について検討する。	・生活習慣や、学習の仕方について、家庭への発信や働きかけがきちんと行われている。すこやかチェック等、具体的な視点を家庭と共有しており、学校・家庭がともに高まっている。子育てに対して不安な思いのある保護者にとってもそれが良いきっかけとなって、基本的な生活習慣づくりに役立っているのではないかと。			
		すこやかタイムを朝の活動時間に位置づけ、児童がストレスマネジメントを身につけられる環境をつくる。学校が楽しいと思う児童90%以上を目指す。	A						
	F 自分の課題を明確にし、課題に応じた活動を計画的に取り入れて、体力や運動能力の向上に根気よく取り組むことができる。	A	体力測定の結果等をもとに、児童の体力・運動能力の課題を明確にし、学校全体として系統立った体力・運動能力向上に取り組んでいく。運動能力調査各種目でA+B65%以上を目指す。				A	○学校生活アンケートの結果では、自分の体力が向上したと感じている児童が89%であった。すこやかタイムにグーパー体操を導入し、学校の課題に挙げる握力の向上を図り、学校全体で、準備運動や柔軟、体幹を鍛える系統立ったトレーニングを実施した。	・アンケートから、自分への自信や、将来展望を持っている児童が多いことがわかる。
	動能力や興味・関心に沿った課題を個々に持たせ、数値目標を設定して向上に向けて意欲を持って継続的に運動に取り組める場や機会をつくる。外遊びチャレンジ登録150以上を目指す。	B	○高学年でランナップチャレンジ会を行い、個々の課題に合わせた練習計画および練習を実施した。5月と11月で、体力測定の得点合計が各学年とも30点以上の伸びがあった。駅伝クラブには50名以上の参加があり、運動が得意でない児童も自分の目標を持って意欲的に取り組めた。 ●低学年の目標設定や、外遊びチャレンジの自主的な取組に課題が見られた。				A	個々の課題を明確にし、今年試験的に行ったランナップチャレンジを継続していく。学校全体の課題項目を共有し、低学年の体力測定の実施種目を検討しながら、系統立った運動計画を立て、取組を行う。	
今年度の成果と次年度への課題		<成果> ・学習に向かう姿勢が高まり、自他の考えの深まりを実感する児童が増えている。 ・自主学習が定着し、自ら課題を見つける力が付いてきている。 ・エンカウンターやストレスマネジメントの取組により、児童の自尊感情を向上させることができた。 ・苦手なことでも積極的に取り組んでみようとする意欲的な児童が増えている。	<課題> ・学習意欲の高まりを土台に、既習事項の定着を図る等の取組によって、二極化の解消を進めていく。 ・学校司書の支援により充実した読書環境を継続・発展させ、読書に親しむ児童が更に増えるよう取り組んでいく。 ・より一層積極的に挨拶が出来る学校になるよう、児童の意識を高め、実践に繋げていく。 ・統合により新しい学校となるが、これまでに築いてきた全職員が一つになって取り組む組織の強みを引き継ぎ、保護者や地域の信頼を得られるよう、よりよい新たな体制へと発展させていく。						